

I 新美南吉(正八)の誕生 ～渡辺家次男として誕生～



新美南吉生家-渡辺家（愛知県半田市）：復元され現在観光地として開放されています

新美南吉は、大正2年7月30日愛知県知多郡半田町において、豊職人の父、渡辺多蔵と母、りゑの次男、正八(しょうはち)として生まれました。実母りゑは病気がちで、正八が4歳の時29歳で病死してしまいます。正八は継母志んの手で、異母弟の益吉とともに育てられました。大正10年には実母りゑの実家、新美家で叔父の鎌治郎が亡くなり、正八が養子となり新美正八として新美家を継ぐことになりました。

大正9年、正八は半田第二尋常小学校に入学します。在学中には知多郡長賞を2度受賞するなど成績優秀でした。

Ⅱ 中学校・代用教員時代



中学校卒業時の新美正八。正八は右端で横を向いている。

父、多蔵は息子の中学校進学に消極的でしたが、小学校の竹内惣九郎校長などの働きかけもあり、大正15年半田中学校(旧制、現：県立半田高等学校)に進学します。中学2年生頃から正八は童謡や童話の創作に取り組み、雑誌への投稿もはじめます。

昭和6年、彼は岡崎師範学校を受験しますが、体格検査で不合格となり、母校半田第二尋常小学校の代用教員となります。雑誌『赤い鳥』に童謡・童話を投稿し、後に代表作となる「ごん狐」が掲載されます。中学時代からペンネーム「南吉」を名乗るようになります。

Ⅲ 東京外国語学校への入学

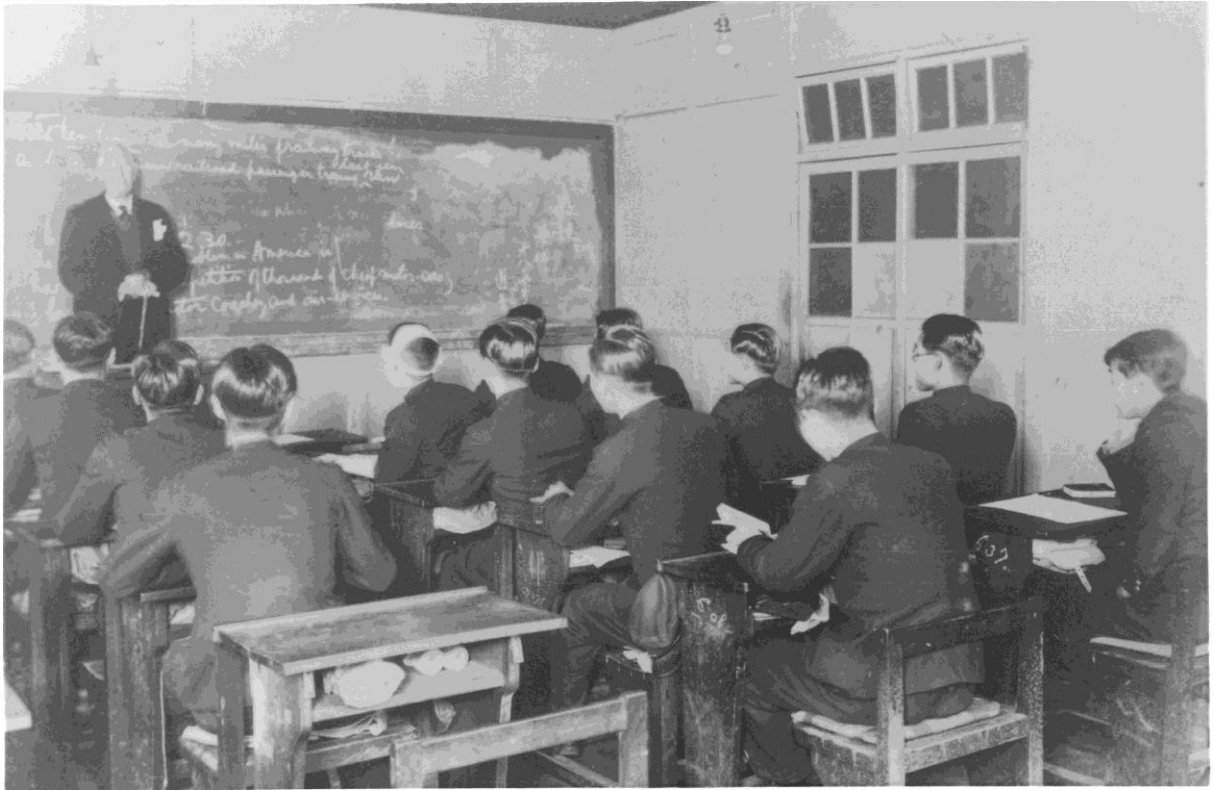


麹町区竹平町校舎

正八は北原白秋門下の童謡詩人による同人誌『チチノキ』の同人となり、童謡詩人巽聖歌と知り合います。昭和6年暮れ、東京高等師範学校受験のために上京した彼は、巽とともに北原白秋を訪ね、そのことから東京への志向を強めます。師範学校受験には失敗した彼ですが、巽の勧めで東京外国語学校英語部文科の受験を決意します。昭和7年無事合格した彼は4月より東京外国語学校に入学します。

当時の東京外国語学校は皇居のお濠端の竹平町に位置していました。校舎は関東大震災後に仮校舎として設置された平屋建て木造校舎であり、生徒たちからは「鶏小屋」と呼ばれました。

IV 東京外国語学校時代の生活 ～寮生活から下宿へ～

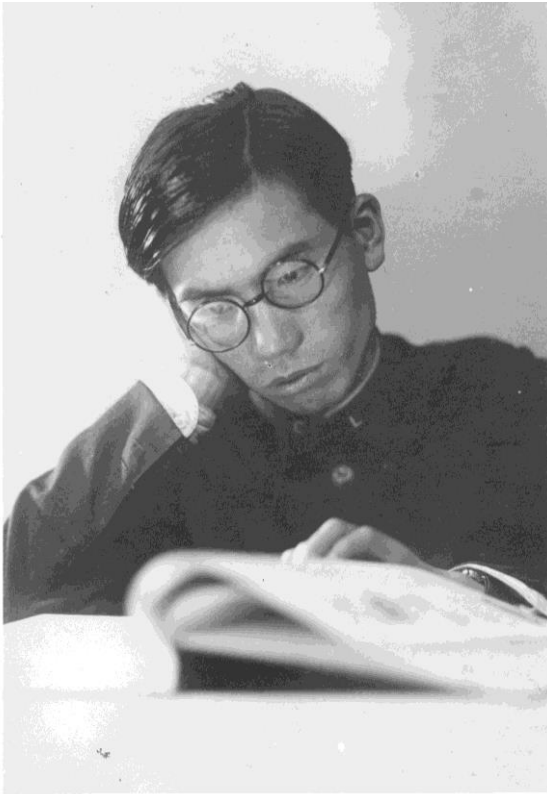


モデル教師の授業を受ける英語部の生徒たち（新美南吉記念館提供）

正八は上京当初、巽聖歌宅に仮住まいしていましたが、昭和7年9月より日新学寮に入寮します。日新学寮は関東大震災後に住居を失った学生のために建設され、地方出身の学生約120名が寝食をともにしました。日記によると、正八は寮では先輩・友人と書物・映画等について談義を交わし、新入生歓迎会にも参加しました。

昭和8年4月末、2年生の春、正八は執筆活動に集中するため下宿探しを進め、5月より中野区新井の電燈付きの貸間に居を移します。下宿を決めた正八ですが、日記には「寮を帰つて見ると何だか他の者達と別れて行くのがものがなく別れにくくなつた」と退寮に寂しさを感じていたようです。

V 東京外国語学校時代の生活 ～国内外の文学作品との出会い～



【左】外語時代-読書する新美正八
(新美南吉記念館提供)



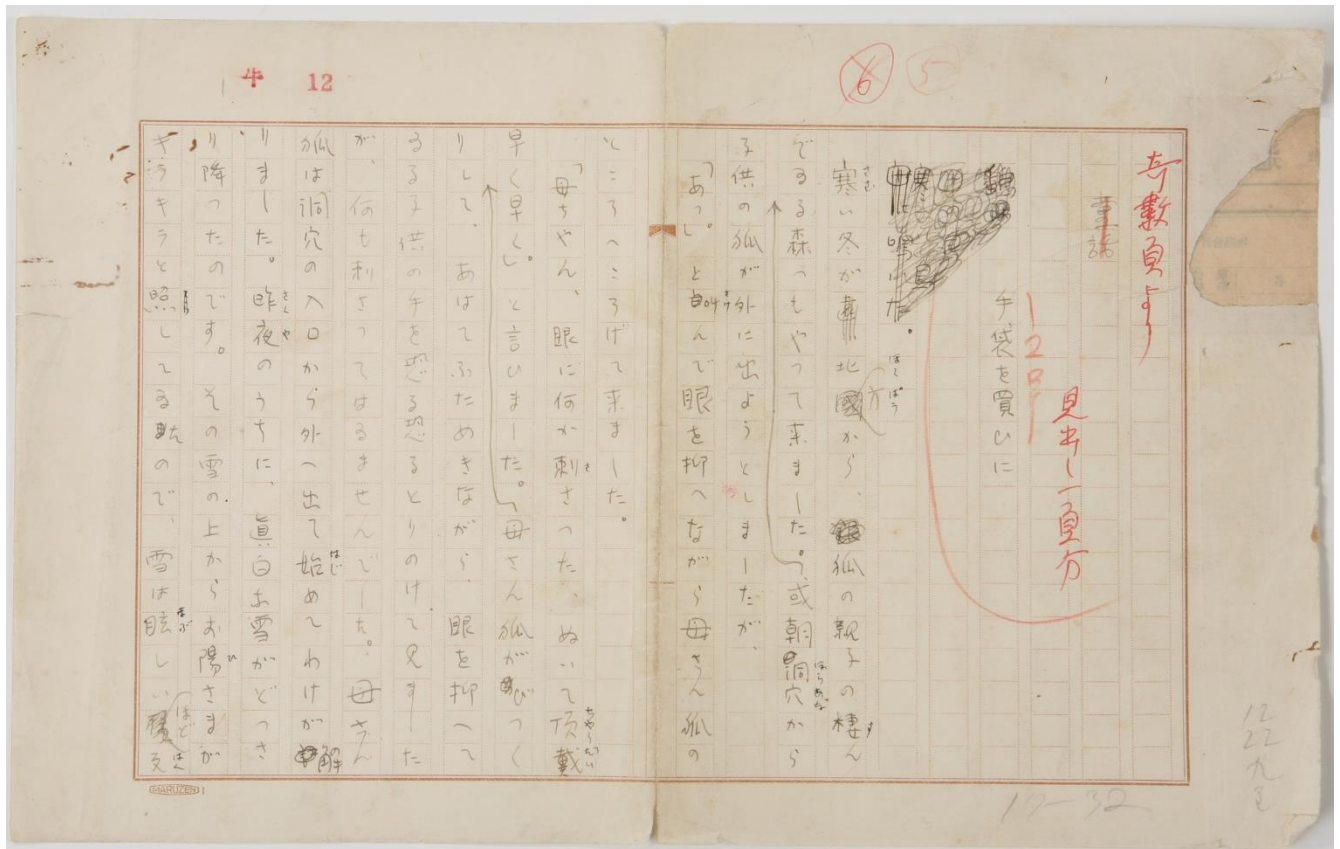
【右上】神田の古書店街(昭和15年頃)
【右下】竹平町校舎の周辺(昭和15年頃)

外語時代の正八は国内外の文学作品を読み漁っていました。昭和8年、2年生春の4月10日の日記には「Lord LyttonのThe Last days of Pompeiiを読み初めた。休暇の間も読み続けてみた為、寮に来て直書物にとりかゝつても少しも苦痛でないが、他の人たちはさうでないらしい。自分が休みの間に原書を九冊片付けたと言つたら足立さんが真(ママ)じなかつたのでうれしく思つた。」とわずか1ヶ月強の休暇で9冊の原書を読んだことが記されています。

正八は神田の古本屋街を頻繁に訪れ原書を手に入れたほか、岩崎民平教授(英語)ら教員から原書の童謡集を借りるなどして読書に勤しみました。



VI 東京外国語学校時代の執筆活動

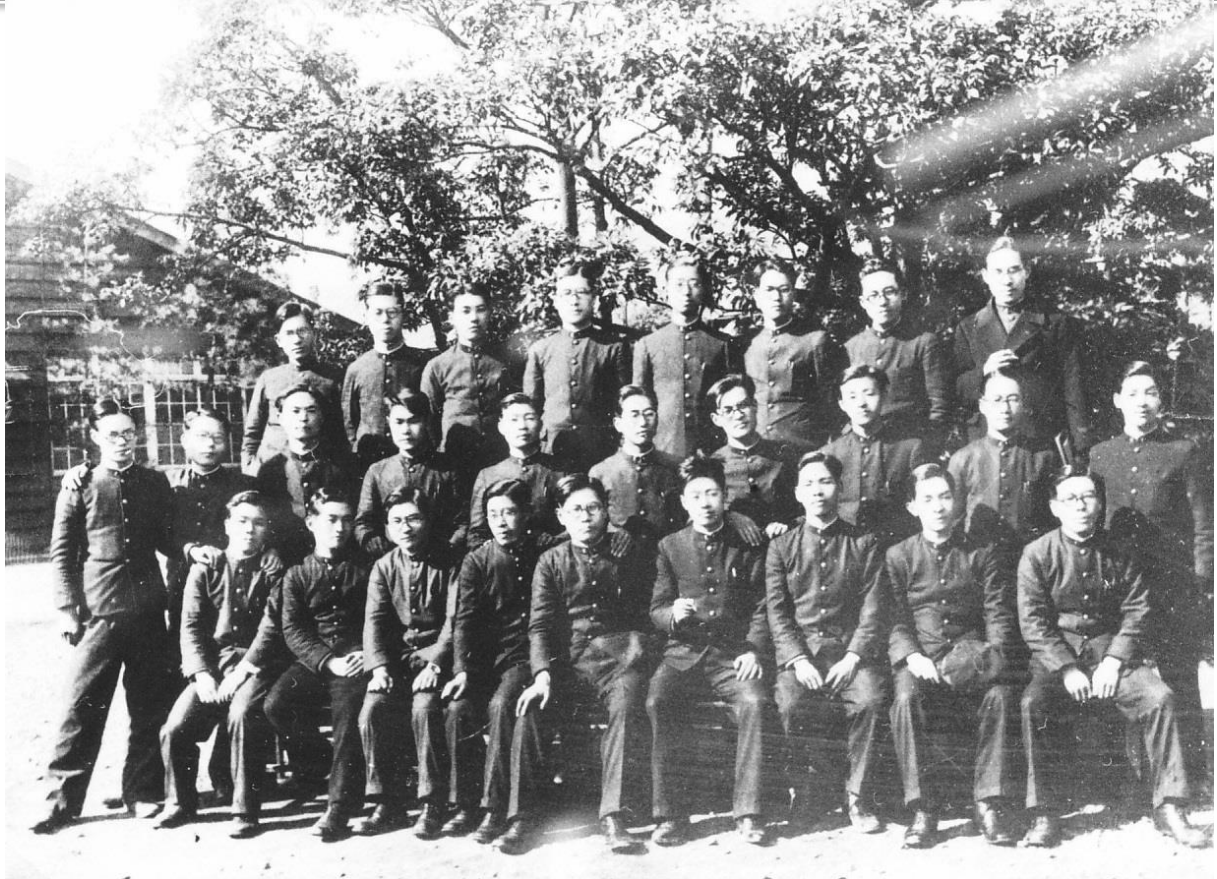


在学中に執筆した「手袋を買ひに」初稿(昭和8年12月26日) (新美南吉記念館提供)

正八は東京外国語学校在学中にも多数の幼年童話を執筆しました。新美南吉の代表作である「手袋を買ひに」は在学中の昭和8年12月26日に執筆されたもので、10年後の昭和18年9月、童話集『牛をつないだ樁の木』で発表されました。

正八は作品の雑誌への投稿も進め、在学中の昭和8年2月には神田の出版社精文館の『カシコイ一年小学生』に「アメダマ」が掲載されました。他方で落選することもあり、昭和8年に『サンデー毎日』に投稿した小説「盆地の伴太郎」は残念ながら落選し、日記には職業として執筆・投稿活動を進めるうえでの苦悩が記されています。

VII 卒業後の進路



東京外国語学校英語部卒業式写真 (新美南吉記念館提供)

昭和11年、東京外国語学校を卒業した正八は、創作活動を進めるために東京で職を求め、昭和15年に予定されていた東京オリンピックに向けた外国人向け商品を取り扱う東京土産品協会に就職します。しかし、10月に咯血を起こし、翌月には半田への帰郷を余儀なくされました。

その後、河和第一尋常高等小学校の代用教員を経て、昭和12年9月飼料生産会社である杉治商会に就職しますが、給与は手取りわずか16円でした。昭和13年、中学校時代の恩師遠藤慎一は正八の窮状を憂い、安城高等女学校長の佐治克己と図って正八に教員免許を取らせませす。そして正八は同校の教員に内定します。

VIII 新美南吉(正八)の最期



童話集『おぢいさんのランプ』・『花のき村と盗人たち』（東京外国語大学附属図書館所蔵）

安城高等女学校への採用は正八に生活の安定をもたらしました。昭和14年の英語部同窓会誌には卒業後初めて正八の名前が、一篇の詩とともに現れます。また正八は『哈爾濱日日新聞』の求めに応じ小説「最後の胡弓弾き」の原稿を書くなど精力的な活動を進めます。しかし、昭和16年長編作『良寛物語 手毬と鉢の子』の執筆後に病状が悪化します。

昭和17年正八は病床にありながら童話集『おぢいさんのランプ』等、次々に作品を書き上げますが、昭和18年3月結核に倒れ、29歳7か月の若さで短い生涯を終えます。